

せむかむじ

発行・古平町史編纂委員会
編集・古平町史編纂室
第二十八号（一日発行）
平成四年一月一日

「場所請負制度」の廃止

近藤 芳一

「場所制度」は、漁場の開発、集落の形成、道路の開発など、この未開の地（蝦夷地）の開発に少なからず貢献した反面、蝦夷人（アイヌ）の立場で場所制度を見る時、これは和人（内地人）による無残きわまる残酷史である。

松前藩にとって蝦夷人（アイヌ）支配、藩の財政確保という点では、場所請負人に依存していたということになろう。

新しい明治政府の「封建制度を打破し、近代国家に生まれ変わる」ためには、この請負制度は時代に逆行するもので制度の廃止は当然であった。

新政府樹立と共に明治二年、場所請負人から漁場持ちになり運上家は本陣と称えることになった。従来の運上家の仕事の内容として、その場所のすべてを取り仕切っていた。従って、即廃止となると、各場所の住民の生活にいろいろな面で支障が出てくる。

明治二年十一月八日、「今すぐ場所を廃止しては種々支障があるので、年々変革していくので、下々の者にも心得違いをしないように」という内容の文書が、各場所の請負人に伝えられている。

この年には、古平出張所はまだ開設されていなかったため、運上家としては非常にとまどったことであろうと想像される。

つづく

ロシヤ人が恐れた『やまと魂』

松石 松 宥 備 （談）

樺太で働いていたころ、近くに本国から逃げて来たというロシヤ人（反共ロシヤ人亡命者）が三十六世帯あった。みんな軍人の家族で、本国にいたころは皆偉い地位であったようだ。

これらの軍人は、日露戦争で日本軍と戦ったことがあり、とても日本人を恐れていた。それは、日本人は大和魂というものを持っていて、死ぬことを少しも恐れない。一人になっても敵に向かって来る。こっちは死にたくないから逃げた。ロシヤは何の希望も無い国で、国内では戦い（革命）が起きている。だから戦争ではわざと負けてやったのだ。それから革命が成功して、ロシヤはスターリンのものになった。

スターリンは、満足な生活をしたくない者はへ次ページ下段へ

頌春

平成四年元旦

古平町史編纂委員会

委員長 越中 庄司 副委員長 吉野 富雄

大谷 喜幸 辻 光彦 服部 雄

八木 金蔵 山口 文彦 西館 昌巳

高野 俊和 宮本 正敏

水見 八郎 田岸 倉治

古平町史編纂室長（総務課長）津田 宏 村井 芳男



「郷土館」欲しいなあ

造ろう！ 郷土館を！

「学ぶとは、何かが変わるころだ」 私はこの言葉を時々思う。私はスポーツ以外全く能のない野人だと自覚している。それでも知ることの喜び、発見に随分と自らを啓発されていくことが多い。人との出会い、これぞ人生定まり——と思う出会い



いもいろいろあった。

『一期一会』 この言葉も、うーんとうなるような言葉である。千利休の弟子、宗仁の本に「茶湯者覚悟十体」というのがあるが、その中に『一期に一度の会』、簡単に言えば、「一生に一度会うこと、一生に一度限ること」という意味らし

いが、私の人生も一瞬の出会いだったかも知れない。しみじみと他人様に教えられて、俗にいう「目からウロコが落ちる」これだよなあ——。

「せたかむい」に原稿を書けとすつかりのせられて、それから二年が過ぎてしまった。古平の昔を一生懸命掘り起こそうと、あのおじいちゃん、このおばあちゃん、いろいろな話を聞いて廻っているが、そのたびに古いものの発見、そして新しい発見の連続である。

私は思う。この町に生きてきた人たちの生活の歴史がだんだん失われ、消えて行ってしまうのが残念でならない。

「蝦夷の古都・古平を愛する心があるならば、この宝を次代へ伝えよう」これらの生活の文化を保存し、見ることが出来る郷土館のようなものがどうし

ても欲しいものだ。声を出さねば、なかなか実現しないものだ。大つきく口を開け、声を出して「郷土館造ってけれやあ！」と、私は叫びたい。

先日も、あるおじいちゃんから「郷土館でも出来れば、サンパでも何でもケルから、早く造れや」と言われ、ポンと肩を叩かれた。「家にもこんなものあるから、どうせ死ぬんだから持つてつてケレや」と言う人。歩いてみると奇特な人も居るもんです。

寄贈するのが嫌な人には、展示するような場所があってもいいと思うんです。こうゆうことが「ふるさと創生」につながっていくことだと思いが……。

—— つづく ——

近ごろは、新年のあいさつ回りも少なくなり、「新年交礼会」がそれに代わったようである。

最も古い記録では、明治三十九年、願雄寺で百二十一人が集まり「古平

新年交礼会

へ前ページより、自分の方に来いと言ったが、老人を河原に集めては電気で殺し、文句を言う者は片っぱしから銃殺にした。これでは自分たちもいつ殺されるかわからないので、それ家族を連れ日本に逃げて来たんだと言う。

そして、樺太も千島もロシア領だったが、ロシアが国内事情で手が回らないでいるうちに、日本の領土になってしまったのだ——と言るのが彼らの言い分で、間宮林蔵、高田屋嘉兵衛はすつかり悪人にされている。しかし、つき合ってたこれらの人たちは、明るくて、正直ないい人たちだった。樺太にいた日本人の方がろくでなかった。そのことは次に書く。

町新年交礼会」が開かれたとある。

昭和四十八年、文化会館が完成した直後の交礼会では、「町長が酒樽の鏡割りをして」と、当時の新年交礼会の様子を伝えている。

めでたいお正月

古平では、お正月——新年を迎える年中行事としての習慣がある。

除夜

この夜は、早く寝ると早く年をとると言つて寝ない家もあり、また、禅源寺・宝海寺では除夜の鐘をつき鳴らしたが、戦争で鐘を供出し

た。その後、禅源寺では新しい鐘が奉納され、参詣者によつてもつかれるようになった。

年夜の祝言葉

「みかど喜ぶ時来たる。家運長久孫の代まで」、お供が「ごもつともごもつとも」とすりこぎ棒を立て、振りながら後に続く。(△仲谷漁場)

年頭の祝言葉

元旦の朝早く「若水」を汲みに、桶と提灯を持って沖村川の上流へ行く。往復、人に会つてもせつかくの「福を取られ

る」と言つて口をきかない。「年の始めの年男、水を汲まずに黄金汲む」と唱えながら家に戻る。元旦は女は起こさない。男が豆殻を焚き付けにして、ストーブ・かまどに火を入れる。「マメマメしく達者であるように」という願ひからである。

(八反田国治さん談)

元旦には店に金屏風を立て、大きな鏡餅を飾る。年始の客が「モロ、モロ」と言つて入つて来る。番頭以下が「ソーレ、ドール」と言つて客を迎える。主

積丹半島へ鉄道敷設を

(五)

——鉄道敷設に激しい政党内閣の争ひ——

大正十五年一月二十六日、古平小学校に百三十余人が出席して総会を開き、会則を改正して名称も『積丹半島鉄道漁港期成同盟会』と改め、新たに漁業経営者を加えて役員を選出した。

- 会長 山口 金治(留任)
- 副会長 高野 常吉(留任)
- 同 大沢吉三郎(新任)

人が応対するが、家人の居ない時には、名刺か手拭を置いて行く。これは、佐渡の商家の習慣とか。(今 清子さん談)

郷社・琴平神社、村社・恵比須神社と初詣でをするが、その途中は誰に会つても絶対口をきかない。琴平神社では「もろもろ年頭」と言い、神社から「祝年賀」「謹賀新年」などと書かれた札を貰い「もろもろ年賀」と言つてあいさつ回りをしてはその札を置いて行く。

漁場主のところでは、床の間

幹事長 斎藤兼太郎(新任) 二月六日、町長朝岡精一、副会長大沢吉三郎、幹事長斎藤兼太郎が上京して、衆議院・貴族院へ請願書を出し、関係官庁にも陳情を行った。その結果、余市ノ余別間鉄道敷設請願が初めて衆議院で採択されたのである。請願が採択されたことによ

の中央に『天照皇大神』その両側に『恵比須』『大黒』の掛け軸を下げ、僧侶に祈禱をしてもらった。(山口 浪さん談)

現在は、外飾りも内飾りもほんのしるしだけに省略されてしまったが、「火の元・流し・便所の三ヶ所には、しめ飾りを忘れてはダメだ」と、若松定衛さんは力説する。

り、鉄道省が次の町村の鉄道路線調査を行うことが、九月十八日、北海道庁長官中川健蔵から告示された。

- 余市郡余市町・大江村
- 古平郡古平町・美国郡美国町
- 積丹郡入舸村・余別村
- (以下略) そして十月五日

から十五日まで、鉄道省の測量隊が来町して実測や経済調査を行った。これをうけて十二月、鉄道省会議で敷設路線を決定するはずであったが、大正天皇が崩御されたため延期となった。

鉄道敷設問題には政党内閣の利害がからむようになり、その争いは激しさを増していった。